反省的実践家としての教師の成長過程解明への一考察

― カード構造化法で見えてきたこと ―

茅ヶ崎市立香川小学校
山田　剛輔

１．はじめに

本研究は、校内授業研究に焦点化して、DSR サイクルを構造化して、経験の浅い教師に授業リフレクションとしてカード構造化法を継続的に行うことによって、授業者が授業を省察し、教師の専門的力量である「省察」と「熟考」の形成過程とその要因を明らかにした。

２．研究の背景

文部科学省（2006、2015）は、教師の多忙化や優れた教員を育成･確保すること等を課題として提示している。こうした中、いかにして今ある教育実践を効果的効率的に実施して教師の成長を促していけるかが求められている。教師の成長を促す省察の方法として、授業者が授業中の出来事を具体的に振り返ることを通して気づきを得る「授業リフレクション」が有効とされてきている（鹿毛、2007）。その１つとして、授業者が「私的」言語によって授業を語るカード構造化法があり、その効果が検証されてきた（井上・藤岡、1995）。

３．研究の目的

そこで､本研究では､カード構造化法を継続的に行い、反省的実践家としての専門的力量である「省察」と「熟考」がどのように形成されていくのかという、教師の成長過程の一端を解明することを目的とした。

４．研究の方法

本研究では、校内授業研究協議会後、正規経験年数２年目の若手教師を対象者とし、筆者がプロンプターとなってカード構造化法を２回実施した。そして、佐藤（１９９１）の「教師の実践的思考様式」の研究を援用して、プロトコルをカテゴリー化して量的･質的分析を行った。また、授業者への影響の要因を探るため、授業研究協議会における講師と同僚の発話の質的分析を行った。

５．研究の結果

まず、２回実施したカード構造化法のプロトコルをカテゴリー化して、量的分析を行った。その結果、「教授」「学習」のいずれの命題も、「省察」としての「状況への思考」の割合が増加した。また、「熟考」として「具体的な改善のための手立て」が増加した。次に、カード構造化法の内容を比較・分析した。その結果、第１回カード構造化法の「課題の認識による省察」と「抽象的な方向性を認識する熟考」から、第２回カード構造化法では事実を的確に認識して「状況への問いをもって思考する省察」へと深まり、課題解決に向けた具体的な改善のための手立てを見出すような「理論と実践が結びつく熟考」へと変容した。また、この変容は、校内研究における同僚や講師によってもたらされた。更に、カード構造化法の効果に関するインタビューを行った結果、授業者の思考が明確になり、子どもを「見る力」が高まり、授業における「即興的な思考」に基づいて授業の再デザインを行うことで授業改善がなされた。そして、教師の力量形成の契機に関するインタビューを行った結果、役割と責任が与えられることで意欲が向上し、研修をより意味のあるものとして吸収し､同僚との対話が活性化した。また、メンタリングが、教師の力量形成の契機となったことが示唆された。

６．考察

これらのことから、SDR サイクルを構造化し、授業の経験に基づいて、授業者の課題（ニーズ）に寄り添い、子どもの姿の多様な見取りから改善のための手立てを同僚と協同で行うことで教師の専門的力量が形成され、教師の成長過程の一端が解明された。

なお、本研究では、その成果が全体へと波及するところには至っていない。そのため、今後、本研究で得られた知見を活かして、学校全体をチームとして日常的に同僚と授業リフレクションを行い、反省的実践家としての教師の専門的力量を高めていくことが求められる。